海府
第十卷

子母澤寛

勝海舟

第五卷

江戸開城

新潮社版

勝海舟　第五巻・江戸開城

昭和四十年四月二十五日印刷
昭和四十年四月三十日発行
著者　子母澤寛
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本　新宿加藤製本所
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(代)
振替東京八〇八番
定価　四三〇円

乱丁本はお取りかえいたします

© Kan Shimozawa Printed in Japan

勝海舟

第五巻・江戸開城

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

河童

海軍総裁の稲葉兵部少輔もやめた。陸軍総裁の松平縫殿頭もやめた。二人とも立派な人だが、結局はお大名だ。それに代るに旗本を以てした事は、勝の気にいった。新たな諸役についで、また一と文句も二た文句もありそうなところをなんとも云わず、雨の中を悠々と元氷川へかえって来た。

「こんだあ、陸軍総裁だとよう」

第一番に夫人へそういって、

「河童が陸へ上って人をたぶらかそうというんだ。どうせ、てっぺんのお皿の水を引っかき廻されて生捕だろうよ」

「いろいろ御苦労様に存じます。でも、海の事も、陸の事も、御奉公の道には変りのないことでございましょうから」

夫人は、にこにこ顔である。

「おや、お前もそんな事をいうかえ。おいら、お城で、その一と言で、思い返して引受けて来たよ。藤沢志摩守が、そんな事を云ってさ」

「左様でございましたか。それはそれは」

「ほんに、叶わねえねえ」

それからお茶一ぱい飲む間もなかった。柳営からの使者で、来る二十六日、仏蘭西のロセス公使が、新役拝命の人達へ面謁のことを申出ている、当日は早暁を以て登城するようにとの達しが来た。

「ロセスというあ蛇だねえ、うるさく、ねばねばとからみつきやがる」

勝は、やがて、夫人の出してくれる朝の膳までの間、老母堂のお居間へ行っていた。忙しさにかまけて、ここのところずいぶん久しくお目にもかからない。

老母堂は、勝を見ると共に、涙がすうーっと瞼に一ぱいになった。

「お前痩せましたねえ。何処か悪いかえ」

「いいえ、一こうに健やかでございますが」

「可哀そうにひどう痩せましたよ」

涙がぽたりと頬へつたうのが勝の目についた。

「父上があのように、どちらかといえば痩せたお方ですから、あたしも、年をとるにつれて、段々似て参るのでしょう。中風の筋のものは痩せるがいいと云う故、この方が結構でんす」

「でもお前は、痩せたばかりか、滅法疲れて居りますよ。色も悪く眼の光も鈍く――」
「さよでんすか」
「いろいろ世の中も大変とやらいうが、お前は、今、何御役を勤めて居りますか」
勝は、近頃、御役の事は、一切母上のお耳には入れぬようにと、家中へ厳しくいってある。だから軍艦奉行も海軍奉行も、御存じがない。

*

今日の五千石も、明日はどうなるか知れない今の時勢、そんな泡のようなことに、母上を喜ばせたり、また忽ちにして悲しませたりすることは、痛わしいと思うからである。
「只今のところ陸軍総裁と申しまする御役ですが、実は、その日その日のことのわからぬ世の態(さま)でして」
「陸軍総裁―御役高は？」
「七千石です」
「え？」
母上は、まるで自分の耳を疑ってでもいるように、激しく首をふりながら、
「いくら？　え、いくら？」
「七千石でございます」
「七、七、七千石――」
母上は暫く、それ以上に口も利けないようであったが、急に、わっと大きな声をあげて、そこへうつ伏した。そのうつ伏したまま、ずっと就いていられる床を逼(は)い下って、両手をぴったりと胸の前に合掌すると、幾度も幾度も、大きな声で泣きながら、頭を下げた。
「も、勿体ない、勿体ない」
「お母上、何をなさるのです」
「よくまあお前――」
「そんな事をなさっては、おからだにさわります。さ、どうか」
勝は、立って、母上を抱くようにして、また床へ戻した。
四十俵の小伜から、七千石の御大身。母上には、それが現実とは思われなかっただろう。そして、そこにいるその七千石の伜を拝まずにはいられなかっただろう。
母上の涙はいつ迄も止まなかった。
「小吉どのが、御番入をしたさに苦しいお金の工面をしては、まだ夜の明けない中から、麹町の御支配へ日参なされたことがありました。本所の入江町からねえ。それもお金がつづかず、とうとう駄目で、その後は、いっそう放埒をなさいましたが、思えばお気の毒なお方でありました。が

ねえ、麟や、小吉どのが御番入をしたいと願われたのは御自分のためばかりではないのですよ、小普請でいては麟太郎の立身が出来ないとおっしゃってねえ。その小吉どののお心は遂げられなかったが、お前、お前は、まあ七千石の――七千石のお身分に。小吉どのが、草葉の蔭でどのように」

麟太郎は、沈黙したままうなずいていた。こうした母上の喜びも、一瞬後にはどうなるかわからない今の有様。喜びが大きければ大きいだけに、また御免にでもなったら、どのように悲しまれるかを思うと、気軽く七千石をお告げして終ったことが、果して良かったか悪かったか、勝は、何かしら背中をすうーっと冷たいものが流れ落ちて行くような気がした。

*

ロセスが新任諸役との面接の日は、青々と晴れて、なんとなく春が何処かで呼んでいるような暖い日であった。

その斜めに射込む朝日の光を半身に受けて、ロセスは、ひどく上機嫌で、人々へお世辞をいって握手をして廻った。ただそれだけのほんの通り一遍の面接である。

すでに恢復再挙のことは、将軍から断られている。それをなおこの上に、おいらどもに逢いてえたあどんな肚か。勝は、ふふんと鼻っ先で笑ったような面つきをしていると、ロセスは、ちらりとそれを見て、ぐいと力をこめて手を握りながら、

「勝さん、後でシャノワン少佐と逢って下さい」

と、勝の仏頂面とはあべこべに、愛嬌を一ぱい漂わせた。

別にこれと云って纏った話のある筈もなく、面接はそれで終ったが、同時に、会計副総裁の成島大隅守が、勝へ顔を寄せるように近づいて、

「ロセス公使がシャノワン少佐と、是非、勝さんを逢わせてくれと頼んでいました、お逢いなさいますか」

と囁いた。

「別に損耗の立つ事もねえでしょう、逢いやんしょうか」

「では、後刻役所へつれて行きます」

「シャノワン少佐たあ滅法懇意だというからあんた同席願い度いねえ」

「承知しました」

「シャノワンの妾は別嬪だとねえ」

勝がこんなところで出しぬけに、そんな事を云ったので、流石の大隅守も、いささかびっくりして、眉をよせながら、え？　と、まじまじ顔を見た。

「お倉とかいったねえ、巷の奴らあ将軍お倉とかいっているそうじゃあねえかえ」

大隅守には、少し冷たい色があった。
「別嬪ですな。何しろ上様の御声がかりという馬鹿な噂が立っている位ですから」
大隅守は、以前騎兵奉行を勤めた。自然、伝習教官の長シャノワン歩兵少佐とは、懇意だ。のち明治六年、大隅守の柳北先生は、仏蘭西へ行った時、巴里で少佐と逢っている。
旧識シャノワン氏を訪ヒ、往年ノ友誼ヲ謝シ、始メテ其内室ニ面ス。氏ノ書室ニ、余ガ嘗ツテ贈リシ日本刀一腰及ビ江戸名所図絵ヲ置ケリ、且ツ余及ビ荊妻ノ写真モ亦此ノ写真帳ニ挿ミテアリ、此ノ旧情ヲ忘レザル、寔ニ感嘆ニ堪ヘタリ。我ガ邦人ニシテ故旧ヲ視ル路人ノ如キ者夥シ、豈慚愧セザルヲ得ンヤ。
柳北先生は、こうその「航西日乗」に書く程の親しさだ。

*

「お倉って奴あ、シャノワンを内からつついて、いろいろこっちの御政道向のことに迄口を入れているてえじゃあねえかえ」
「さあ、知りませんな」
「毛唐人は、女に甘めえから、今度は妾の世話をする時あそのつもりで人選りに気をつけなくちゃあならねえねえ」
お倉は、日本橋の相当な商人の娘だ。これを日本国のためだとかなんとかいって妾に口説いたのは大隅守だなどという噂があった。元より嘘だろうが、勝は、これを皮肉ったのかも知れない。
それから半刻ばかり経っていた。シャノワン少佐は、陸軍総裁の役所で、勝と向い合って腰を下している。大隅守も横で、その長い顎を撫でていたし、騎兵大尉ジュ・プスケーも傍にいた。
勝は、
「少佐は、回陽艦で、薩艦攻撃の指揮をなされたそうでんすが、どんな塩梅でありましたか」
いきなり、こう口を切った。大隅守は、如何にも吃驚した表情でぐいと、身を反らせた。シャノワンの眼は、ちらりと、大隅守を見、プスケーを見た。そして、暫くして静かに、
「御旗本は強い、勇敢です。わたしは、感じました」
といった。
実は、シャノワン少佐が、大阪を出帆帰東したあの日の回陽艦に軍事顧問の格で乗っていたことが第一非常な秘密であった。まして、洋上薩摩の艦に出逢って、これを砲撃した指揮をとったなどということは、決して外へもれない筈である。これを勝が知っていた。

「戦さには、必ず勝つ人達です」
「さよでんすか。あたしらあ、旗本には、腰抜けが多いといっているが」
「そんな事はない」
ブスケー大尉も横から、
「それは勝さんの思い違いです」
と口を入れた。
「さよでんしょうか」
「そうですとも。わたしの云う事に間違いはありません」
「間違い、ありませんかねえ」
勝は、大隅守を見ながらにやにやした。
ブスケーは、伝習教官の中では一番日本語がよくつかえた。自分で治部輔などといった。維新後も横浜に留って、日本の女と結婚し元老院の雇となり、生涯を日本に送って、土となった。現在の役人の大礼服はこの人の考案だと伝えられる。
「ですから」
シャノワン少佐は、その癖か、右の肩を少し持ち上げるようにして、
「あんたに告げることがある」

*

シャノワン少佐は、顔を突出すような恰好をして、勝を見詰めながら、少し速口である。
「われわれ今日まで心血をそそいで伝習した。而して、その成果は十分に挙がっている。即ち、日本伝習生は既にその業を終ったのである。士官数百名、悉く、熟練兵というべきもの、それに総裁として、あなたの就任を見ました。われわれ欣幸とするばかりか、実に、今や戦えば必ず勝つの精兵たるのみならず、士官、兵卒、皆勇猛、その勢は盛大である。総裁！　戦いなさい。決然戦いに決し給え。われわれもまた指揮をとって、その一分を尽そう。勝総裁！疑々を生じて、時機を失してはなりません」
「はあ」
勝は、いっこうに気乗りのしない返事をした。少佐は、傍に置いた封筒を開いて、大きな図を取出した。
「われわれは、あなたの就任をきいて、元より開戦を信じ、直ちに戦闘手配、攻守の策を樹て、ここにそれを図を以てした。あなたの膝下に献ずるを光栄とするものである。われわれは今日までの教授を今実戦に用いて、親しくこれを見ることを欣ぶ。総裁、先ず、軍を箱根の嶮に拠らせ――」
勝は、少し眉を寄せた。そして、
「はあ」
といったが、それっきり言葉をつづけなかった。

少佐は忽ち、ひどく不快なものに包まれた表情をした。それを見るとすぐ勝は、

「開戦か否か、明日、きっぱりとお答え申します。それ迄は、ただ万事をそのままにして置いていただきやんしょう」

「明日？　いや、それはいけません。疑わしきはどしどし訊き給え。そして、われわれに、その決するところを聞かせて貰い度いものです」

「明日、明日」

勝は、そういってから、

「成島さん、あんたからもいいように云って下さい。明日、明日——」

大隅守も、元より勝の態度に対する不満が一ぱい顔にあった。がこの上、ここに在って、少佐の気持を損ねることを恐れたのだろう、頻りに、二人の間を取持って、やがて士官達は席を立った。

少佐もブスケー大尉も、やや荒い態度である。勝に当っているのである。

しかし、最後の別れ際に少佐は勝の手を握って、

「総裁、あなたは今、この幕府を背負って立たれた。あなたの決心一つで、倒れもする。そしてまた一そう権威権力のあるものとも為し得る」

＊

勝はその手を握り返したが、ちらりと見た少佐の眼が、はっとする程激しく燃えているのに、動悸っとした。ロセス公使の眼とは違う、この人は只単純に、例えば日本の武士のようなひたすらな感激を以て、開戦を説くのである。別に野心も無ければ、策もない、仏蘭西も無ければ日本も無い。武人は戦さの中に生き、戦さの中に死ぬを本懐とする、その気持だけで決戦を説いているのだ。

そう思うと、ふと何かしら頭の下るようなものを感ずる。そして、徳川の家人として、その自分の胸の奥の奥の、ずっと奥底にあるものを、そのまま、この異国武人の前にさらけ出してやりたいような衝動を押えて、思わず、眼を伏せた。

「明日を楽しみます」

少佐は、更に、堅く握り返して、それを打ふりながら、別れて行った。

その頃。

元氷川には、今日もまた愚にもつかない奴が二人、玄関先で大声をあげていた。相変らずお糸が出ているが、このおなご一人を対手にいつ迄も、ずいぶん、ごてごて云っている。ここんところ毎日々々こんな手合がやって来て、元氷川も滅法うるさいことである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一人が首桶を抱いて、返答次第によってはこれへ勝の首を打落して入れてかえるのだと、一こといっては、ぴしゃぴしゃと桶を叩き、また一こといってはそれを叩く。もう三十がらみの角力取のような大きな男である。何処のものとも名乗らないが、本所辺りの小普請ものらしい言葉つき。一人は、もう白髪のいい年である。これは鎧櫃を背負って、槍をついている。

「どのように申されましても、御留守なのでございますから」

お糸はいつもと少しも変らないが、首桶は、今度は、ぴしゃぴしゃぴしゃぴしゃつづけ様にそれを叩いて、

「この老人迄が、今からでも出陣の覚悟で来ているのだ。三百年天下の覇権を握った徳川家を、薩長の田舎っぺえに駄斗をつけられて堪るものか。江戸の人間は、一人残らず討死の覚悟だ。勝安房守がどうしても恭順だの、謹慎だのといって、われらと共に戦場に馳せ向う事が出来ないならば、首をよこせ、首を」

お糸は、珍しく、ちょっと、うるさいというような顔つきをした。如何になんでもうるさくも成ろう、来るものも、来るものも、お糸にして見ればとんと話がわからないから——。

鎧櫃は、槍の鞘を払った。

「われわれの来たしるしに、その戸へ、江戸武士の心を通ずる風穴を一つ開けてやろう」

槍をしごきながら、やあ、やあと声をかけて、いきなり、左側の杉戸へ、ずぶりと一突きした。突ささると共に、ばりばりと、柾目が縦に、割れた。槍も腕もいい加減なものだからだろう。

*

馬鹿は得てして調子に乗る。それに誘われて、首桶は、そこへそ奴を投り出すようにして、さっと刀をぬくと、つづいて、その杉戸へ自分も斬りつけた。

お糸は、びっくりして、奥へ逃込んで行って終った。

「態を見ろ。腰抜け武士の勝安房守が帰って来たら、転倒するだろう」

「江戸っ子が臆面もなく、恭順だの謹慎だのと、よくまあ洒々といえたものだ。ぺっ、ぺっぺっ」

首桶がそこら中に、青っぱなを引っかけて、さて、まだ、何かわるさでもしようとして、一足式台へ掛けた時に、ぬうーっと、門を入って来た武士がある。筒袖のぶっ裂き羽織に、陣笠をかぶり、たっつけ姿。右手に菖蒲皮の鞭を持っているのは、門前まで馬で来たのだろう。左手は、何やら縮緬のふくさに包んだものを持っている。

門を入ると、突当りが玄関、植込一つないのだから、こ

この様子は往来からでもよく見える。
「おいおい」
静かだが、深く含みのこもった言葉をかけられて、二人は一斉に振向いた。
「詰らぬ狼藉は止せ」
「何？」
首桶は、抜刀をぶら下げたまま、
「余計なことだ」
「余計でもなんでもいい。勝先生は公儀御役にある方だ、軽んじては御上に相済まんだろう」
「その御上の英明を覆い奉って、恭順だ謹慎だなどと、武士の風上にも置けぬ事をほざいているというから、懲らしめのためにやっているのだ」
「杉戸は、斬られても、突かれても痛いとも痒いとも云わんだろう。文句があったら先生がお出での時にやって来て、大いに論ずるがよかろう」
「うむ――」
「近来、食いあぶれの浪人や、小普請のものが、頻りに市中を暴れ廻って何かいい餌にでも有りつこうとしているとの噂が高い。お主ら、その仲間と見られては心外だろう」
「いい餌だと？　馬鹿をいうな、われわれは天下を憂えて実に熱血にかられ、じっとしては居れんのだ」
「そうか。結構々々。しかし、その憂国家にしては、やる事がちと軽々しい。おい！」
武士は、鞭を、軽くうしろ帯へさすと、その返す手で、ぽーんと、鎧櫃を下から突上げた。別に力を入れもしなかったが、槍の老人はふらふらっと前へ倒れると、そこの式台へ手をついて四つん這いになった。
途端に櫃の蓋が、ばたりと前へ跳飛んで落ちた。中は鎧どころか、鍋一つ入っていない空っぽだ。

*

「ほい、どうする。こ奴あ鎧が煙になったわ」
武士は、腹を抱えて笑った。
「何をしやがるのだ」
首桶は、飛んだところで、無造作に尻を割られて、忽ち逆上したのだろう。抜いていた刀で、いきなり、さっと斬込んで来たものである。老人は立ち上ると、これも鎧櫃を投げ出して、槍を構えた。
「馬鹿共！　黙って帰してやろうとしたに、図に乗りやがってなんということだ。この上に赤っ恥をかきたいのか」
武士は、包みを持ったまま、今度は物凄い眼で睨みつけた。
その次の瞬間には、もう若い奴は、式台の前に仰向けに叩きつけられ、老人は槍をふっ飛ばされて逃げ腰で、遠く

に小さくなっていた。
「真に天下を憂うるの赤誠があるならば、いつでもおれの屋敷へ訪ねて来い。代々木新町、おれは、別手組の吉岡艮太夫だ」
「ええ吉岡先生——伊庭道場の」
艮太夫は、もう、知らぬ顔で立っていた。二人はこそこそこそそその辺りに落ち散ったものを拾い集めて、遂には、艮太夫のうしろ姿に一礼しながら立去った。
「頼みます、吉岡艮太夫」
艮太夫は、傍で針が転んだことがあったような顔もせず、悠々と内へ向ってそういった。
すぐお糸が出て来た。
「いらせられませ。どうも、有難うございました」
「やあ。近頃は、あんなのが、ちょいちょい来るのか」
「ちょいちょいどころでは御座りませぬ。毎日のようでございますが、今日のは、些か手ひどい狼藉でございました」
「毎日のように来る。ふーむ」
「でも、凡そはただ悪口雑言でおかえりになります」
「取次も大変だな。で、先生は？」
「はい、たった今、裏口からおかえりでございます」
「裏口から？」
「ええもうこの頃は、裏口は元より、お湯殿の切戸から入っていらっしゃられたり、お庭先から入られたりでございます」
「そうですか。では、取次いで呉れ」
「どうぞお通り下さいまし。今、廊下先であなた様のお声をきかれまして、大そうおよろこびでお通し申せとの事でございましたから」
艮太夫が通ると、勝は衣装をその客間へ持出させて、夫人に介添されて、召替をしていた。
「やあやあ、これあ珍らしい。何時おかえりだった」

*

勝は上機嫌で立ったままでそう声をかけた。艮太夫は、一応の挨拶をして、それから夫人へも久濶を述べて、さて、
「一昨日着きました」
と、はじめて、先の答をした。
「いろいろ聞いていた。とんだ苦労だったらしいね。やっぱり、おっかないおなかまが一緒らしいねえ。幾人でんすえ」
「同勢五十人」
「ほう、吉岡艮太夫の命奪りが、まだ五十人もついているかえ」
艮太夫は苦笑して、黙っていた。

「吉岡さん、折角来てくれやんしたが、あたしゃあこれから急がしく仏蘭西のロセス公使に逢いに行くんでね。夕刻迄あ竹橋の仏蘭西屋敷にいるてえからね。あんたの大阪の話もいろいろ聞かせて貰いてえんだ。今夜、どうでんす。下男の夜這じゃあねえが、九つ過ぎにまた出直して来ちゃあくれやせんか」

「九つ過ぎ？」

「とんと屋敷にも落着けねえ始末でねえ」

「は。艮太夫も是非、御意を得たい節がありますので、それではその頃にお訪ねします。が、これは」

艮太夫は、ふくさの包みを夫人と勝の中頃へ押出して、実は、木村兵庫頭様から先生のところへお邪魔するなら、序手と申しては失礼だがというので、使者を頼まれた品です、御風味いただきたいとの事でした、といった。

「なんです」

「ワーフルというのだそうです。兵庫頭様は、いやもうすっかり西洋かぶれで、閉口いたしました」

「ワーフル？　西洋菓子だね」

「兵庫頭様御夫妻のお手作りで大そうな御自慢でした」

勝は、夫人へ、おい、お前、ちょっと御覧な。ワーフルという菓子あ、あたしら米利堅でよく食べたよ。うめえもんだ。兵庫頭様ああれを自分で拵えるかえ。とこれは艮太夫へいって、にこにこした。

「いやもう兵庫頭様がたすきがけで、やられたんですが、十遍に一度位よりはうまく出来ないようなのです。夫人がいっていました。どうも殿様の西洋かぶれも困ったもので、無地の壁や襖などを、みんな米利堅から持って来た花模様の更紗で張替えましたので、がらりと様子が変って落着かないと——」

「ほう。着物までこれ迄のものを止めて、ごわごわした更紗にしてるという噂をきいたが、それじゃあ、やっぱりほんとだねえ」

「そうです。着物どころか、とんと西洋料理にもこられて、夫人はほんとにいやです、と、おこぼしでした」

*

「だが——この間、上様御帰東の際は、御浜御殿でビスケットを御朝食に差上げて、お褒めをいただいてね。上様も、前夜来一度も御膳につかれなかったとやらで、お助りだったとさ」

「それも御自慢で申していました」

艮太夫は、なお笑いながら、ふところから紙片を取出し、

「わたしにも、ワーフルを作れというので、御覧下さい、このような処方を書いてくれました。はっはっ。鶏卵百

匁。数十二三程。砂糖百匁。麺粉五十匁或ハ七十八匁。先ズ砂糖ヲ猶ヨク摺リ、次ニ鶏卵ヲワリ入レ又ヨク摺リ、後麺粉ヲ少シズツ入レ。形ニテ焼ク。というんです」

「ああいうお人の西洋かぶれは面白い。根が生一本の方だからね」

その中に仕度が出来た。

「折角見えたに、ほんにすまねえね。あたしゃあ出掛けるよ」

「どうぞ、わたしもその辺までお供を致します」

「あたしゃ馬だよ」

「丁度よろしかった。実は、わたしも馬で、隣のお寺の門内へ繋いで来ましたから」

やがて、二人の馬は轡を並べて、盛徳寺の坂を登って行った。艮太夫は四辺にかまわぬ声で、

「先生、どうも、さっきのように、鎧櫃を背負った阿呆などが、毎日やって来るようでは、充分御身辺へ気をつけなくてはいかんでしょう。お一人で、気軽るに出歩かれるのは危険だ。何処から、何時どんな頓狂な奴が飛出して来るかも知れないから——相当な護衛が必要ではないですかなあ」

「護衛かえ。幾人つれて歩くえ」

「え？」

「いや、二三十人も連れて歩くかえ」

「真逆そんなには」

「十人つれて歩くかえ。五人かえ」

「別に幾人という事もないでしょうがなあ」

「五人のところへ対手が十人で来たらどうするえ。十人のとこへ二十人。百人つれていても二百人来られちゃあかなわねえねえ。吉岡さん、結句一人で歩いても同じ事よ。なあに勝あ臆病だから、おっかねえのが出たらすぐ逃げっちまうから大丈夫でんさあ」

「そう云って終えば、それっ切りの話ではありますがねえ」

「第一、あたしゃあ貧乏だから、用心棒は頼めねえ」

衣更着

勝が、仏蘭西屋敷でロセスに逢えたのは、もう灯が入ってからである。いきなり云った。あなた方の御親切はしかと肝に銘じて有難く思いますが、如何様に仰せられましても、幕府には毛頭戦をする考えはないのです、考えがないというよりは、日本国の国柄として、この戦さは断じて出来ないのです。要は、只それに尽きる、われわれの国柄については、すでに御承知でいられる事ですが、失礼なが

ら、その天子としてのわれわれの真髄は、些か御わかりになられてはいないように思われます、この点を御諒解下さって、この際シャノワン少佐以下、伝習士官の方々に一先ず御退身が願い度い、詰り解雇の事を御承諾願い度いのです。

ロセスは、はじめの中は、眉を寄せて、如何にも不愉快そうに、じろじろじろじろ勝を見るだけであったが、やがて、

「勝さん、お言葉はわかりました。承知しました」

と、手を握った。勝は、ほっとした。なんということなしに、からだが熱くなった。

「有難く存じます」

「わたしからも伝えるが、シャノワン少佐には、あなたからも直接説明をして下さい」

「は。明日改めて御返事を申す約束でありましたがこれから直ぐに訪問しましょう」

半刻後。勝の馬は、シャノワン少佐の宿舎の前に繋がれていた。

少佐は、首をふりながらいった。そして、固く握った拳は、時々、卓を叩きそうにさえした。

「あなたはそういうが、あなたの部下は誰一人そんな事は云わない。みな、戦をする気でいる。西国の諸州は皆幕府に叛いている、しかし、東国の諸州は、悉くこれとは反対で、兵を挙げて、薩長二国を撃つ事を議しているではないですか。あなたは、陸軍総裁として、すでにこの大兵力がある、日本国大半の精兵は、あなたの手中にある。皆、あなたの指令を待っている。わたしはその勢の甚だ熾んなのを見て、実にこれあるかなと感じているのだ。然るに、あなたは——」

「まあ、お待ち下さい。戦に勝つとか勝たぬとかいう前に、われわれには、もっと考えなくてはならぬ事があるのです、もっと大きな眼を開いて見なくてはならぬものがあるのです」

「それはわかっている。が、わたしは決して天子をないがしろにしろとは云わんのだ。只、一旦大いに戦に勝って後、東国諸州を固守し、雄を養い、時宜を謀り、大阪に出で、海陸を塞ぐ時は敵は施すべきの策を失うのである。こうなれば、彼はいやでも、望むに和を以てするであろう。その時こそ——」

少佐は、ぐいと身を乗出した。

*

「充分なる趣意を以て寛厳時に応じ、志を達する事が出来るではないか、勝さん。これは実に容易なことだ、至難ではないのだ。あんたは、その容易を捨ててかえり見ず、む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com